

東京歌会（第五十八回）

平成二十九年八月十七日（木）、会場：文京シビックセンター三階B会議室。詠草は各二首六首。出席者五名（大石久美、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

熱たかき身は浮くごとし耳近くギシギシと響る氷の海が

林 博子

もう一つの歌からも、入院中の歌としれる。響（な）る。熱たかき、は発熱の状態。耳近く、ギシギシと響る、が氷枕を使っていることの手がかり。身は浮くごとし、が遠い幻想を導くようだ。熱のある状態が感覚的に把握されている。

片づかぬものが出ていてそのことで人住むかたち小貸家ある

小野澤繁雄

やや理がかつている。片づかないものが出ていることは、空き家の指標でもあるところ。小貸家では、むしろそのことで人が住んでいるということになる、という。今、空き家は多いので、歌からいろいろ話題がひろがった。

一つ二つ鶴の折り紙散りてをり小学生も飾りし黄の鶴

中川禮子

もう一つの歌で、次のようなことがわかる。二宮駅にガラスのうさぎ像（少女像）が置かれていて、八月前半、その像を守るように千羽鶴が飾られた。この歌の情景はやや断片だが、小学生も飾りし、が挿入句的に説明になっている。小学生も糸通しを手伝っている。一つ二つは、その糸から外れた鶴か。二宮に疎開していた児童文学作家・高木敏子が自身の戦争体験をつづつたのが「ガラスのうさぎ」。その話がしられなくなったことから、最近、千羽鶴を飾るようになったという（新聞記事）。

東京歌会（第五十九回）

九月二十一日（木）、会場：文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十四首。出席者六名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

県内にのこる樋門のそのひとつ思いのほか水の量ある

小野澤繁雄

樋門は、制水施設の一つ。近代化遺構、埼玉県内に多く残っているという。樋門がわかれば、読みに迷うことはない。上、下句のつながりがやや遠い。

はらからと雖も赤に緋に紅のありて混らず咲くさるすべり

林 博子

混（じ）らず。近い色でも色の違いはあって、混じることはない。兄弟姉妹の間でも、何か気持ちの違いのようなこともある。作者は妹を失ったばかりで、傷心の歌でもある。

遠く聞く神輿をかつぐ児らの声わが家の前は通らずなりて

丸山弘子

遠くに聞く。こども神輿。今はこどもが少なくなっている。わが家の前は通らずなりて、でやや淋しい感じか。神輿をかつぐ児ら、とみえるように詠った。

陽に映えて黄花コスモス咲くところまつわりながらしじみ蝶舞う

市川茂子

しじみ蝶は小さい。平地、低地帯でみる。黄花コスモスが眼にみえるようだ。名前をしるまでは黄色コスモスと云っていたという声もある。今は多くみるところ。

イタリアントマトとオクラ、インゲンが生りて賑はふ夏の畑よ

布宮慈子

小さな畑のようだ。イタリアントマト、は赤みが強い、長ほそい。イタリアントマト、インゲン、と音がそろって、またカタカナ表記がリズムカルでいい。

エレベーターを降りきる迄にかたわらのみどりごとかわせる笑みのふたたび三たび

大石久美

作者は十一階に住むが、エレベーター内なのだ。いくらかの時間があり、ひとたびでなくふたたび三たび。四句が長い。嬰兒、の表記は選択されていない。

片づけてゐるときに見る新聞の切り抜に見出づ惜しき人の名

中川禮子

切り抜（き）。訃報だろうか。新聞なので、いくらか知られた人ということになる。惜しき人の名、にはニュアンス（含み）がある。

東京歌会（第六十回）

十月十九日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は多く各二首十三首。出席者六名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

川土手はまちの境にありなれて人の歩みもそこまできとなる

小野澤繁雄

三句、ありなれて、に議論があつまった。川土手があるからには川があり、そこがまちの境になっている。そこは見やすい。下句はいいという。

姉と妹互みに睦ぶ短さよりリリアン遊びの絲のほろほろ

林 博子

姉と妹、いっしょにいた期間は短い。作者は、妹をさいきん失っている。リリアン遊び、は女性には理解に問題がない。ほろほろ、ほつれやすいのだ。

取り寄せの新米すこしいただきて磨ぎこぼれたる粒をひろえり

市川茂子

新米の貴重さ。人間関係でもある。下句、にはわかるという声が多い。米のとき方はそれぞれで、同じでないようだ、少し話題になった。

さよならと別れし吾子のふりかえり手をあげてより歩み去りたり

大石久美

当日会場で即詠したもの。息子さんがこのところ車で会場まで送ってくれている。そこでの親子のやりとり。上句の語順だが、入れかえたいと提案があった。

朝よりビル改修の足場組む金属音ときをり若きらの声

丸山弘子

下句は、メリハリの効いたいい方。足場だけ請けおうような業者もある。職人には、ここにきて外国人も多く、若者が多いのだ。足場は、金属で組む。

朝毎に吾妻嶺に冠雪のニュースあり今年もあと二ヶ月となる

池田桂一

作者は福島県伊達市に住む。吾妻山の初冠雪は、ことし早かったようだ。冠雪は、徐々に厚くなってゆくのか、ニュースの決まりになっている。下句がいい。

いつしんにわれが英語を写しゐる子らに離るか任期果てなば

中川禮子

作者は、教師をしていた。われが英語、は黒板に板書した英語だろう。すでに過去になるのだろうか、当時の場所で詠んでいる。

(報告…小野澤繁雄)